

2020年5月10日 聖餐式説教

主イエスは復活されてから四十日間この世におられました。この復活節に学んでまいりましたように主イエスは多くの人々に現われ、それぞれの人々に復活の出会いを果たされました。人々は恐れと悲しみの底から起き上がり、力を与えられたのでした。人々の前に復活の姿を現し、人々が復活の主との出会いを果たす、これが復活された主イエスの第一の使命でした。そして主イエスがこの四十日間になさったもうひとつのことは、天にお帰りになる前に最後の説教をなさることでした。これは、主イエスのこの世での最後の説教であったことから「訣別説教」と言われております。本日の部分はその主イエスの訣別説教の一部です。

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている」。

この箇所は、葬送式でよく朗読される箇所です。主イエスは天に私達の住まいを備えるためにお帰りになられた、主イエスは私達に、神の国にはあなたの場所が用意してある、しかも主イエス御自身が備えてくださる、ということを実感しております。

これは私達にとって大きな慰めであり、また主なる神が私達を愛してくださっていることを実感できる言葉であり、私達の先輩がこの世の信仰生活をおえて主に召されたとき、本人もさることながら家族や私達教会に集うものにとっても深い慰めを与える言葉です。

主イエスは私達人間がまだ行ったことがない、今日に至るまでまだ誰も行ったことのないところへ行こうとされておりました。しかし時が来たならば私達も迎え入れられ、主イエスが備えてくださった住まいに憩うことになるということです。これは神の国のことをさしているの言うまでもないことですが、神の国を伝えられた主イエスが最後に私達に与えてくださったのが、神の国へ迎え入れてくださるといふ約束だったのです。

主イエスは更に続けて言われました。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」。

復活された主イエスが私達に与えられたのは、道であり、真理であり、命である主イエスを人々に伝えることだということです。神の国を伝え、今神の国に帰ろうとされている主イエスご自身を私達は伝えていくのだということなのです。

この言葉は主イエスの訣別説教であると最初に申し上げましたが、どんな人であっても、人生最後の言葉というのは人々の心を打ち、またその人の全生涯がかかっている重要なものです。同様にこの「わたしは道であり、真理であり、命である」は主イエスのこの世での全伝道生涯がかかっている言葉です。

さらに続いて主イエスは言われています。「わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう。こうして、父は子によって栄光をお受けになる。わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう」。

主イエスは、私達に祈ることを教えられているのです。私達が御心にかなう願いをなすとき、心の底から主を呼び求めるとき、必ず聞いてくださる、しかもそれは主なる神御自身が栄光を受けるためである。主イエスが祈りを聞いてくださることは、主なる神が栄光を受けることなのだということです。

私たちは祈る時、「主イエス・キリストによってお願いいたします」と言って祈りを結びます。これは主イエスが、本日の福音書にあった通り、「わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう」と約束してくださったからです。私たちの祈りを、主イエスは私たち以上にご存知でおられる、それを御心にかなうように主なる神に伝えてくださるとの約束です。私たちはこの約束を確信して、日々祈っているのを改めて思い起こしたいと思います。

主は一番よい道を私達に示し、聞いてくださることを確信させてくださったのです。私達が困難にあうとき、主イエスの存在が見えなくなってしまうとき、思い出したい言葉です。フィリポが「主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます」と言ったのは、主イエスのこの約束がまだ信じ切れていない、不安が心の中に残っているということです。すなわちこれはフィリポだけではなく、私達自身の現在の有り様を言っております。そのフィリポに主イエスが言われた言葉をもう一度味わって終りたいと思います。

「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父をお示してください』と言うのか。わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである」。